

団長の独り言

6月9日(日)「演劇の冒険者」

今週も当たり前のように土曜日、日曜日がやってきて、これまた当たり前のように、メンバー達が元気に稽古場に顔を揃える。

稽古場の雰囲気はすごくいい。

その雰囲気の中、充実した稽古を行うと、ここ最近ほどの役者も気持ちいいくらい良くダメがおとる。

だから稽古も順調に進む。

土曜日に出された同じダメを今日は出さずに済むというのは、本当に演出家冥利に尽きるといえる。

各役者は、ダメ出しの意味をちゃんと理解していて、私の想像をはるかに上回る芝居で、ダメを通す実力も皆さん持ち合わせているので、演出をしていても、とても楽しい。

この調子で進めば、かなり完成度の高い芝居になるのは間違いない。

それでも、さらに上を目指してもらおうべく、あえてダメを出す、そのダメに込めようと、またさらにいい感じの芝居となるので、そのいい感じの芝居が共演者に波及して、ちゃんと相手に届くセリフで、会話のキャッチボールも出来ていて、聞いていて心地よい。

早口でセリフをまくしたてる者もないし、たんに大声を出して何を言っているのか？分からないようなセリフを言うものもないし、身体に余計な力が入って、ロボットの動きをする役者もない。

これまで声が小さいと指摘を受けた役者も声量が増して、それでいて怒鳴っているわけじゃなくて、ちゃんとセリフが届くという技量も身につけていて、かなりハイレベルな芝居となっているのは、死に物狂いで自主稽古をしたのでしよう。

何度も何度も台本を読み込んで、稽古日以外でも、極力、集まれるメンバー達は稽古場に集まっているそうだ。

みな稽古のない時でも、普段からちゃんと発声練習を続けているのだから、毎日のように台本にとらめっこしている賜物だろう。

本稽古で行うのは、発表の場であるというのも、ちゃんと理解をしているからこそ、本稽古のない時間では本気で努力している。

それほどの努力をしなきゃ、あそこまで成長しない。

ちよいと前の劇団ふあんハウスでは、どうしても出来ない人がいた場合、セリフを大幅にカットされたし、役を降ろされるつてこともあった。

さすがに今はそこまではないけれど、それでも今のメンバー達は、つねに緊張感を持って稽古に挑んでいる。

自分の頭の中だけで、色々な理屈を考えて、それが正しく間違っているということもなくなり、余計な事を考えず、素直に演じるのが結果としてナチュラルな感情を呼び起こし、そのナチュラルさが相手役に伝わり、相乗効果で、ますますいい感じになっているシーンもある。

これはお互いのコミュニケーションがちゃんと取れているからこそ。

感心したのが、メンバーを思いやる気持ちも持っていて、「相手の立場」でモノを考える事が出来るので、ギクシャクした稽古場にはならず、例えばダメを出されて悩んでいる役者がいると、「自主稽古しましょう」と、誰からともなく声をかけあうという環境。

勿論、皆さん、普段は色々とお忙しいので、劇団ふあんハウスに人生全てを捧げる！というわけにはいかないけれど、それでも「ちゃんとした芝居を創る責任」を皆が自覚しているからこそ、自主稽古に参加出来ないものは、自分で訓練しているし、自主稽古に参加できるものは参加して、メンバー同士のコミュニケーションを大切にしている。

今日も稽古終了後、すぐにそれぞれが声を掛け合い、忙しい時間を割いて、それぞれのセクションでの稽古を行う計画をたてていた。

メンバーが厳しいダメを出されている最中に居眠りをするなんて人はいない。(当たり前だね…笑)

この調子でいけば、おそらく今度の稽古では、さらなるいい芝居が期待できる。

劇団ふあんハウスを設立し26年目。

今では、劇団ふあんハウスの本場のファンの方も大勢いて下さる劇団となっている。そうした全てのお客様のためにも、ちゃんとした本物の芝居をお届けするため、「まっ、いいか」は無くして、ちゃんと、やって行こうと思う。

これは前回号に描いた劇団・惑星ピスタチオの元メンバーで、現在、病氣療養中の保村大和さんが、10数年前、劇団ふあんハウス公演を御覧になった後に下さったメッセージ。(惑星・ピスタチオ・・・1989年〜2000年まで活動。観客動員20000人を突破し、日本の小劇場界で大人気を博した劇団)

ここから：保村さんのメッセージ。「大変面白く、感動しました。ふあんハウスの取り組んでいることは、きつとまだ誰も踏み込んだことのない領域への冒険の旅だと思えます。まさに演劇の冒険者です。」

色々なことを言ってくる奴もいるでしょうし、道に迷うこともあるでしょうけど、ふあんハウスにしかたどり着くことのできない『ふあんハウス流・本物の芝居』を目指して突き進んでください！」まさに「本物」の方からのこのような熱いメッセージは、とて勇気を頂ける。

稽古が出来た事に感謝して、「演劇の冒険者」の旅は続くのでした。